



絆～ほんとうに

大切なもの ②

<パブー版>

比良岡美紀

(2005、2007、2012)

目次

皆様へ	1
(6)	1
(7)	3
(8)	5
(9)	6
(10)	8
奥付	
奥付	12

皆様へ

『絆～ほんとうに大切なもの』パブー版の2冊目です。
同窓会当日の、会場へ向かうまでの様子を含めました。

ここでは変更を加え、過去の連載になかった個所を追加しました。
俊彦のあだ名についてです。過去にはさらっと流しただけでしたが、
今回はその由来について、誰が言い出したのか、どうしてそれを受け入れたのか、
などを追加しました。

今後も5～6ページずつ、一冊にまとめて公開しようと思っています。
連載しているような気分です（笑）

どうぞよろしく願いいたします。

一冊目（①）はこちらから
<https://puboo.jp/book/43673>

③はこちらから
<https://puboo.jp/book/44553>

（6）

俊彦が目を覚ますと、隣に寝ていたはずのミチルがいない。時計を見るとまだ7時にもなっていない。ミチルのやつ、こんな早くからいったいどこへ行くんだ。俊彦は起き上がり、居間へ向かった。するとミチルだけではなく、剛一も身支度をしていた。

俊彦は思わず、「どうした。どこへ行くんだ」と言った。その声に驚いたのか、ミチルは俊彦を睨んで言った。「おととい言ったじゃない、今日は模擬面接の説明会なの」

しまった、そうだったか。俊彦は頭をすくめた。だがミチルは剛一の世話に忙しい。俊彦は努めて平静に、言葉を続けた。

「説明会？ たかが予行演習に随分と念を入れるんだな」

「やめてよ、そんな言い方。予行演習は重要なものよ。雰囲気にも吞まれないよう訓練するんだから。その成果を最大限に引き出すための説明会なんですって」俊彦は色々言いたいことがあったが、身支度を始めることにした。鬚をそり、歯を磨き、ワイシャツを着てネクタイをしめる。剛一の身支度を整え、一緒に持ち物を確認しながらミチルが言った。

「そういうわけだから、朝ごはんは一人で食べてね。冷蔵庫にサンドイッチがあるわ」
「俺も一緒に出るよ。会議の資料、まだ読んでないんだ」俊彦はコートを羽織ると冷蔵庫から皿を取り出し、サンドイッチをラップごと包んでポケットに入れた。

「お皿は台所に出しておいてね」

「ん？ あ、ああ」

あわてて皿を台所の流しに置くと、俊彦は二人と連れ立って家を出た。

「いつもの駅でいいんだろう？」

「ええ」

「じゃあ三人で行こう。たまにはいいだろう」

ミチルは苦笑いとも微笑みともつかない表情を浮かべ、

「そうね」と言った。

それにしても、と俊彦は剛一に目をやった。時折スキップしながら、弾むように歩いている。

「剛一のやつ、ずいぶん嬉しそうだな。説明会がそんなに楽しみなのか？」

ミチルはあきれたように言った。

「そんなわけではないでしょう。剛一はね、あなたが一緒だから嬉しいのよ」

「俺が一緒だから？」

「そう。だって、あなた剛一と一緒にいることなんてないじゃない。子供っていうのはね、そういう何気ないことを喜ぶものなの」

「そういうもんかな」

「そうよ」

ミチルに断言され、さて何を言ったものかと考えていると、剛一が話しかけてきた。

(7)

「ねえお父さん、これ知ってる？」「ん？ なんだ？」

「本当に大切なものは目に見えない、っていうの。なんだか分かる？」

「本当に大切なもの？ 目に見えないって？」とオウム返しのように言って、俊彦は考えた。

「あれだ。ええとたしか、星の王子さまだ。違うか？」

「正解！ お父さんすごい、よく知ってるね」

「まあな。これでも昔は文学少年だったんだ」「へえ～」

剛一にすごいと言われ思わず相好を崩した俊彦は、ミチルに尋ねた。

「俺が知ったのは中学のころだったが、最近の小学校はもうそんなことを教えているのか」

「学校じゃないの、塾なのよ。心の教育がなんとかって、面接でも聞かれるんですって」

なんだ、受験なのか。俊彦は苦虫をかみつぶしたような、なんともいえない表情になった。

子供が文学に興味を持ってくれるのは嬉しいが、そのきっかけが受験というのはあまりにさびしすぎる。そう言いたげな表情だった。

その夜、俊彦は久しぶりに夢を見た。『星の王子さま』に出てくる王子さまと会話をしている。本当に大切なものは目に見えないんだ、そう言われたとき、王子さまが女性に変わり、俊彦は驚いた。依子だった。しかも学生時代とまったく変わらない。

呆気にとられる俊彦に、依子は言った。あなたの大切なものは何ですか？ 俊彦が考えていると、答えを促すように、あらゆる方向から声が聞こえてくる。あなたの大切なものは、何ですか……。その声にはエコーがかかっていた。

突然、依子はミチルになり、俊彦を問いつめた。あなた、大切なものはあたしって、なぜ言ってくれないの？ あなたの大切なものはあたしでしょう？ あなたのあなたの一大切な大切な一ものはものは……

「やめてくれーっ！」俊彦は思わず大声をあげた。

「あなた、どうしたの？ 大丈夫？」

やめてくれ、ミチル、やめてくれないか。

「一体どうしたっていの！？ あなた変よ！」

その強い口調で目が覚めた俊彦は、そこが自宅の寝室であることに気づき、ふうっと安堵のため息をついた。

「ひどくうなされてたわ。汗びっしょりじゃない」そう言われ初めて、自分がひどく汗をかいていることを知った。「それにお化けでも見たような顔してる。顔洗ったら？」お化け、そうだな。あんなの、化け物以外にありえない。

着替えて洗面台へ向かう俊彦の背中から、ミチルが言う。

「あたしはもう少し寝かせてもらいます。睡眠不足はお肌の大敵なんですから！」

ああ、構わないさ。お前がいつまで寝てたって世の中変わりはない。心の中で悪態をつくど、俊彦は自分に喝を入れるように、冷たい水で顔を洗った。

(8)

「じゃあ行ってくるよ」同窓会当日、依子は朝早く出かける夫を送り出していた。

「夕飯は済ませてくるから心配しなくていい。大学の友達とゆっくりしておいで」

「はい」そう言いながら、依子は一抹の寂しさを覚えていた。

やはりこの人は、私のことを気にかけてはくれないのだから。気にしていたら、早く帰ってこいとか何とか、言って当然じゃなくて？ 夫を送り出し、玄関先の時計を見て、依子はため息をついた。パーティーまで4時間もあるわ。どうしよう……。ふと、依子は理恵の言葉を思い出した。本当に大切なものは目に見えない、か……。

その時、電話が鳴った。

「もしもし、依子？ 今から出て来られる？」理恵だった。

「え？ 何、どうしたの？」

「今日の式典で花束を受け取るはずだった人が、急用で来られなくなったの。代わりに受け取ってもらえないかしら？」

「え、なんで私なの？」

「あなたがいいって、みんなが言うのよ」

事情はよく分からなかったが、依子は依頼を受けることにした。

「分かったわ。何時にどこへ行けばいい？」

「講堂分かるわよね？そこに、10時ごろに来てくれる？」

もう一度時計を見る。10時なら、今から支度して出れば間に合う。

「10時に講堂ね、分かったわ。じゃあ後でね」

最寄り駅に着くと、依子は料金表を見上げた。最近はタッチ式のICカードが全盛だが、やはり切符を買って乗る方が、風情があると思っていた。券売機の列に並び、ふと脇に目をやると、点字の表示が目に入った。

そうそう、新聞の折り込みに点字通信講座のチラシが入っていたわ。伯父さんも緑内障とかで視力が衰えてるって言ってたけど、点字を覚えたら役に立てるかしら——。などと考えているうち順番が回ってきたので、依子は切符を買ったあと点字表示に近づき、時折手で触れながら熱心に見始めた。しばらくして後ろからポンポンと肩を叩く人があり、依子は振り返ったが、見知った人には思えない。訝しげな依子にその人は言った。「お手伝いしましょうか？どちらまで行かれるんですか？」

どうやら視覚障害者と間違えられたらしい。依子は真っ赤になって、

「大丈夫です、すみません！」と言うと、逃げるように改札を通過してホームへ急いだ。

(9)

同窓会当日、俊彦は模擬面接に出かける剛一とミチルを朝早く送り出すと、大学生のころ読んだ小説を取り出した。当時読んだのは8歳上の兄に借りたハードカバーだったが、この日手にしていたのは昨日古本市で見つけた文庫本だった。この小説は、作者の意図に反して売れたんだ。兄はそう言っていつもの文学談義を始めた。

「世間のやつらはこれが恋愛小説だと言っているが、そんな莫迦な話があるものか。これは生と死を正面から捉えた作品だ。お前もそう思うだろう、俊彦？」

俊彦も読みはしたものの、よく理解できなかった。曖昧に返事をすると、兄は得意になって自説を披露するのだった。

「要するに、生者が死者を悼むかぎり、死者は生き続けるんだ。この小説でも、主人公と親友の恋人、その恋人が死んだ後は彼女の友人と、主人公は関係を持つ。それは恋愛なんかじゃない。彼らは死者の存在を確かめるために交わるんだよ。交わっているかぎり、死者はそこにいるからだ」

同じタイトルの曲が昔あったらどうか。心なしか、もの悲しいメロディだったように思う。

そんなことを考えながらゆっくりとページをめくる。正直、今でもよく分からないなあ。

俊彦はあらためて兄の偉大さを思った。小さい頃から何かにつけ兄と比較されてきたが、不思議と嫌ではなかった。子供心にも、兄はすごい人だと思っていたのだ。その兄が3年前、交通事故で亡くなり、すっかりふさぎこんでしまった父は、後を追うようにその翌年に亡くなった。

結局俺は兄貴の代わりにはなれなかった。母は父の死後、兄の幻影にとらわれ続けた俊彦をいたわるように、これからはあんたの人生を歩みなさい、と言った。

だが俊彦にとって人生とは兄がいてこそそのものだった。兄がいなくなった今、自分はどう生きていけばいいのか、俊彦にはまだ分からない。しかしこうして兄のことを思っていれば、兄が存在していると感じるのも確かだった。兄が言っていたように、生きている者が死んだ者を悼むかぎり死者は生き続けるのであれば、兄は今でもどこかに存在しているに違いないのだ。

ふと時計を見てもう9時を回ろうとしていることに気づき、俊彦はあわてて身支度を始めた。今日は9時半からミサだったな。在学中は一度も出席しなかったが、せっかくだから出ることしよう。山岡や小西も来ると言っていたし――。

二人は学生時代、俊彦が常に行動を共にしていた同級生だ。卒業後もしばらくは会っていたが、互いに結婚して子供ができると疎遠になってしまい、会うのは実に10年ぶりだった。俊彦は駅へ向かいながら、学生時代のことを思い出していた。

(10)

大学時代、俊彦には「トシちゃん」というあだ名があった。最初に言い出したのは、理恵だった。入学早々行なわれたオリエンテーションで組分けがあり、小西、山岡、俊彦、それに理恵と依子が同組になった。理恵はみんなにあだ名をつけると言い、各人の下の名前をうまくアレンジして、次々あだ名で呼んでいった。最後が俊彦だった。

俊彦さん、俊彦くん、俊彦ちゃん……理恵はつぶやきながら少し考え、そうだ、と顔を輝かせた。

「トシちゃんがいいわ！」と理恵が叫び、山岡も小西も噴き出した。そりゃあいい、ぴったりだ、と二人が言う中、ひとり懽然とする俊彦に理恵は言った。

「だって考えてみてよ。トシさんじゃおじさん臭いし、トシくんじゃ子どもみたいでしょう？」

「だからって――」

口をとがらせる俊彦に、

「いいじゃない。これで女子の人気も上がるわよ」と理恵は言った。

女子の人気上がる？ 本当に？

俊彦は理恵のうしろにいる依子に視線を向けた。その瞬間、目と目が合い、依子が怪訝そうな顔をする。俊彦はあわてて目をそらした。気づかれたらどうか……。その後も俊彦は、ちらちらと依子の様子をうかがった。依子とはいえば、俊彦を気にする様子はまったくくない。ショックを感じながら、もし本当に人気上がるなら、彼女に近づくチャンスが増えるかもしれないと、俊彦は思った。それで、意に沿わないあだ名も受け入れようと思ったのだ。

でもなあ、さっぱりだったなあ。

駅に着いて、改札にICカードをタッチしながら、俊彦は思った。結局、松平さんに一杯食わされたのかもな。単に俺を「トシちゃん」と呼びたかっただけなんだ。もっともらしい理由を言われたもんだから、それもいいかと思ってしまった。運のつきだな。まあでも、山岡と小西という友達もできたことだし、プラマイゼロかな。

ちょうどそこへ、電車が入って来た。大学の最寄り駅へ、乗換なしで行ける電車だ。

そういえば、川端さんに告白すると言ったとき、山岡はがんばれ、って言ってくれたんだっけか。駄目だったよと言いにいったら、小西も一緒に、まあ気にするな、という口ぶりだったが、よく考えたら変な話だよな。まるで俺が失敗すると分かっていたみたいだ。いやしかし、いくらなんでもあいつらが予知能力を持っているわけではない。考えず

ぎだなー。

俊彦は電車に乗り込み、ドアに近い座席に腰をおろした。大学までは5駅ほどで決して遠いわけではないが、最近は短距離でもやけに座りたくなる。学生時代は実家から1時間半かけて通っていたが、行きも帰りもほとんど座ったことがなかった。

俺も年だな。俊彦はあらためてそう思った。

奥付

奥付

絆 ～ほんとうに大切なもの パブー版②

<https://puboo.jp/book/43688>

著者：miki-hiraoka

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/43688>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43688>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<https://puboo.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

絆〜ほんとうに大切なもの パプー版②

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
